



ブリキ印刷今昔談

『ブリキ印刷・60年』

(1)

史談会開催日

昭和43年(1968年) 3月23日

■ 語る人

曾雌 源氏

(東洋製缶相談役)

■【曾雌 源氏略歴】・

・ 明治22年東京神田に生れる。明治39年芝神明町の小島印刷所に入社。大正10年東洋製缶が米国から平台印刷機を輸入して印刷を始めた時招かれて同社印刷部門を担当。25年間勤務し多くの技術者養成に尽くされた。昭和25年からは東洋ブリキ印刷株式会社で後進の指導に尽力された。

家は代々二本差し、扶持を取上げられてからはお定まりのどん底貧乏。そんな中で育ったが、とにかく学校というものが大嫌い。その頃は尋常4年、高等4年という時代で、私は高等も卒業しないで小僧に入ってしまった。小僧になってから18歳になるまで職を変えること8回、何か自分の身につく仕事を探さなければならんという気持ちが常にあったからであろう。

住いがちょうど芝・宇田川町に移った時、小島印刷が近くにあったということでここに入社。小島さんはそれまでの歩みを淡々と語ってくれた。「僕は若い時に秀英舎に入って18年働き、ブリキ印刷を創業して初めて今日の僕になった。この仕事は日本で初めて僕が始めたんだが、この仕事を覚えたら将来非常にいいぞ」そういう事を言われ、どうかして自分の工場を持つようになりたいというような希望を持って、5年の契約書を入れた。

小島さんが秀英舎に入ったのが12年、夜学などへ行行って勉強をして18年、30歳の時にブリキ印刷を始めた。ブリキ印刷を始めた時には久米吉之助さんが機械を動かしたそうである。

小島印刷の日給は18銭であった。その前、日露戦争の頃に靴の工場にいて大人と一緒に仕事をして、日に1円ぐらゐを稼いでいた。その頃16、7の子供が30円、40円を稼ぐなどということは新聞ダネになるようなこと、その後のメリヤス工場でも日給40銭を取っていた。40銭を捨てて18銭の仕事ではあったが、なんとかしてこの仕事を覚えなければならない、と子供心にも決心したのだった。それにしても18銭は一人が暮らしていくのがやっと。朝食4銭、昼と夜で10銭という時代であった。小島印刷に私が入った時には、ドイツの平台機械が1台、紙印刷の機械が1台入っていた。

(2)

小島印刷に入ったとき、ちょうど仕事は森永製菓の仕事を始めていた。小島さんと森永の初代社長とは同年輩で、小島さんも18年の苦勞の末小さい工場から始め、森永さんも苦心してアメリカから製菓方法を持ってきたという苦勞人同士、しかも同じ年に仕事を始めたということで、非常に親密になられたようであった。森永の仕事は小島印刷で全部やっていて、当時バラで売られていたキャラメルを箱に入れて売り出すようになったのもこの時からだった。明治41、2年のことである。

ブリキ印刷はほとんどが玩具で、ままごとのお皿とか赤ちゃんの持つガラガラ、そんなものを作っていた。お得意は今の蔵前のオモチャ屋さん。缶を始めたのはやはり森永の缶、そしてライオン歯磨の製品であった。少し後になって、インド缶といってインドに輸出する缶があった。大きさは4種類あって、表にはインドの劇画、蓋の裏には鏡がついていた。何を入れるという目的はなかったのに、大変流行したものだ。また今では東洋製缶が全部やっているが、味の素の缶も、最初はやはり小島さんであった。

その後暫くして中村鉄工の大谷という人がブリキ印刷機を国産として初めて作ったのだが、その機械は日本の各地に出たようである。小島印刷には最後には平台の小判が2台、大判が1台、それからドイツの輪転機が1台入っていた。

私がいる間に、小島印刷は日の出の勢いの如く伸びていったが、色々話があって大正10年に東洋製缶に移るということになった。ブリキ印刷は小島さんが一番初めということは良く聞いているが、同年のことだと思うが、月島の清瀬商会でも始めたということを聞いた事がある。そこは王冠を専門にやっていたと言う。ブリキ印刷で一番面倒なものは乾燥機だが、観覧車式という方法は、清瀬さんのところで考えたと思う。その頃のブリキ印刷会社は、小島さん、清瀬さん、それから明治41年に発足した明光堂などがあつた。大正になってからは東京印刷、望月さんなど十何社かになった。とにかく終戦前までは三十何軒かで、終戦後に急に増えたと言える。しかし現在でも関東で50社、関西で40社ぐらいであるから、ブリキ印刷会社は非常に少ないと言える。一番最初にブリキ印刷機を使ったのは久米さんであったが、この人は度外れに頑固な人で、この人の影響で私もその後ずっと頑固になったのではないかと考えている。



(3)

初期のブリキ印刷の技術について話してみよう。ブリキ印刷では必ず白刷りをするが、最初には白インキが無く3本ロールを使い亜鉛のワニスで練って白いインキを作った。そういう苦労もあった。この白刷りというのは、王冠、缶詰缶には使わなかったが、その他にはどうしても必要なもので、そうして作った白インキは鉛色をしていてひどいものであった。その後インキは東洋インキ、諸星インキ、中西インキなどで苦労して出すようになったが、とにかくブリキ印刷のインキは、紙印刷のインキとは全然違って、熱湯をかけるのでみな飛んでしまって困ったことがある。

多くはドイツのデッカー商会のインキを使っていたが、黄とか墨とか白は国産でもよかったが、しかし赤系統、藍、コバルトなどというのはほとんどドイツのインキであった。それからまたニスには手を焼いた。刷る時には無事に校正通りに刷っても、いざニスをかけると色が変わってしまう。というのはニスが焼けて色がついてしまうということで、温度を下げて時間を長くするとかなんとか出、ニスには苦労したものである。ニスも最初はドイツのマンダーとかコーバルというメーカーのニスを使っていたと思う。大体ニスにはニスそのものの色があるために、薄い色の上にかければ校正刷りとは全然違った色になるのは当然なので、そういうふうに、ブリキ印刷には多くの苦労がつきまっていた。

技術、材料はその後だんだんと進歩したのであるが、戦争中には企業合同によって8社ほどになってしまった。その時期明光堂は東洋製缶に完全に買収され、買収の値段は15万円であった。

私が入った頃の東洋製缶はひどいもので、何から何まで出鱈目であった。私が入る前にどこから来たのか知らないが5人くらいいて、入る前に私の弟子の新井という兵隊帰りの男をやってみたが、どうしても収まりはつかない。機械もアメリカの平台だったが、これもとんでもない機械だった。最初はしょうがないからそれで始めて、後に大谷式の小判の機械が2台、震災のときには日本タイプの機械が入った。乾燥機もこれではいけない、ということで、トンネル式を作ってなんとかかんとかやっていた。東洋製缶は食缶が専門であった。食缶といっても当時のは大したものではなくて、福神漬、鯛でんぶ、鯛味噌、豆、海苔といったものの缶の印刷であった。その印刷が機械は何とかいっても乾燥機が不備な為、時間をかけてやっても、中身を入れて熱をかけるとその印刷が全部剥げてしまう、傷はつく、積んでおけばくっついてしまう、で、どうにもこうにも苦労が多かった。昔のブリキ印刷をやった人なら、やはり同じような



苦勞をしたことと思う。小島印刷は美術缶だけであつたからよかったが、食缶では本当に苦勞した。

その頃東洋製缶にヒンドルという人がいて、その人が印刷に非常に興味を持って私どもの意見も取り入れてくれて、それで初めて輪転機を買うことになったのである。昭和の初めのことであつた。

(4)

昭和の初めの頃、東洋製缶に入った輪転機は、フクサーヌというアメリカの商社から入れたものであつた。これは能率としては38枚から45枚で、当時平台で18枚から20枚やっていることからみれば、正に驚くべきことであつた。「そんな機械を入れて仕事があるのか」と小島さんから聞かれたが、仕事は無限だから小島さんでも入れたらどうか、と威張つたものである。

乾燥機はやはりトンネル式で、熱の部分が四間、冷却部分が二間という短いもので、アメリカではそれでも良かったらしいが、日本ではどうしようもないため、すぐに熱の部分を一間伸ばして五間にした。終戦前まではそれで十分にやっていた。現在では比較にならないほど大きくなってしまったが……。

その輪転機を入れるとき、私にアメリカに行って勉強してこい、という話があつたが、とてもその器でないから、向こうから技術者を呼んでくれればついて勉強するからと頼んだわけである。実際は私一人が行って勉強してきて、またみんなに教えるなどということは大変な事だからごめんだ、という気持ちがあつたのだが。

輪転機が4万円、乾燥機が4万4千円、それを4千円まけさせて、その4千円でゼナーという技師に2ヶ月来てもらった。その時私どもの給料が150円ぐらいで高給なほうだったが、向こうの人間は1ヶ月に2千円という勘定であつた。

ゼナーという技師には機械の据え付けから印刷まで色々な事を習ったが、その時面白い事があつた。機械はバラバラになってきていて、部品を広げてみて見ると、俺たちにも出来るんじゃないかということで、先に立って組立てをやったわけである。翌日その技師が来て、こっちが折角組み立てたものをまたバラバラにさせて、自分がやるから見ていろ、と言う。向こうの奴は力があるから頑丈に締め付けてしまう。いざ出来上がった時に回してみようとやってみても一人では回らない。これじゃしょうがないじゃないか、と



言うと、最初から軽く回るようにしたら機械は駄目になる。これでいいんだ、と言う。やはりその通りで、慣れてくれば一人で回せるようになり、機械の調子も良い。締めるところは最初から締め、留める所はきちんと留めておかなければ、とつくづく思った次第である。

毛唐から教わった事はその他にも色々あった。例えば機械にネジを取り付ける時に、頭には五分、六分といっても多少の違いがあり、考えの無い人はスパナを直すことがあり、これもとんでもない事で、スパナにやすりをかけて直すものではない、ということを厳しく言われたりした。そのような細かいところではあったが、そうして教わったことは東洋製缶にいる間、何かと役に立ったと言える。

(5)

終戦まで私は市川憲次さんに色々お世話になった。それは昭和18年、ブリキ印刷は企業整備で印刷が出来ない事になり、機械は遊休設備として供出することになった。市川さんはその供出の係りをやっていた関係で、市川さんに相談したものだ。

当時東京製缶の東京工場には2色機1台、単色が5台、ニス引き機が3台あり、そのうち輪転機が4台、乾燥機も2台か3台持っていた。供出届けを出して幾日経った時に担当の巡査がハンマーを持ってきて、目の前でぶち壊す。ちょっとでも傷つけないようにし、油をさしてかわいがってきた機械が目の前でぶち壊されるんだから、本当に涙が出た。そういうふうにして第1回目の供出が行われた。第2回目の供出のとき、どうするかと色々考え、市川さんの所に相談に行ったわけである。届けを出したら駄目だから握っていなさい、というふうに教わって、私が握りつぶしてしまったのだが、その後調べに来たかどうか判らぬうちに終戦になったわけである。

こういう事があったからこそ、終戦後すぐに東洋製缶が仕事を始められたわけである。それで市川さんには本当に感謝している次第である。

金属印刷の歴史について

(通産省・印刷業実態調査報告書から抜粋)

◇明治時代

わが国で、金属印刷を最初に始めた人は小島長蔵氏で、西洋から

金属印刷された煙草の灰皿が大量に輸入されているのに着目し、金属印刷の企業を始めた。この時の金属印刷機械は、ドイツのユーゴー・コッホ社から紙印刷の機械、インク、石版などの輸入業者中西京次郎商店を通じて輸入した機械であった。印刷方式はオフセット印刷で、動力に3馬力ガスエンジンを用い、乾燥設備にはガスバーナーによる固定式乾燥炉を用いていた。

技術に関しては、金属印刷が日本最初のことでもあり当然技術者がいないが、小島氏は長年の紙印刷の技術を生かし、更に機械の運転に関しては久米吉之助氏の手を借りて研究し、技術をマスターされたようである。

当時の印刷能力は、大判（20 インチ× 28 インチ）のものを毎分 17 枚～18 枚の速さで印刷していたといわれている。これを今日の平台印刷機の速さ毎分 20～24 枚に比較すれば誠に優れた技術というべきであろう。印刷された製品は、金属玩具が大部分であったが、これが有毒色素があるとして、大阪、名古屋地区において使用が禁止され、一時、金属印刷業が難関に直面した一幕もあったと記録されている。また原料であるブリキについては、国産ブリキがなく全量輸入（大正の第一次大戦まで続いた）によって賄われていた。この輸入ブリキは、ブリキ版を半田で密封した完全梱包のブリキ缶で輸入され、印刷に使用する際には必ず一枚ずつ、ホコリ、油などを拭き取って全品検査をしたのち使用していたといわれている。

◇ 大正時代

大正時代は第一次大戦の影響による金属印刷業の隆盛な時代である。すなわちそれまで英国、オランダ、ドイツなどの西欧諸国から東洋方面へ大量の金属印刷加工品が輸出されていたが、戦争により貿易が中断することとなって、西欧品のかわり日本からの輸出が行われるようになって、非常な好況時代を迎えた。

当時わが国から輸出されていた主な品目としては、インド向けの薬品缶、中国向けの茶缶、煙草缶、ロシア向けの染料などで、いずれも美しく印刷された美術缶であったといわれている。大正9年には東洋製缶において食料用缶詰缶の金属印刷の研究が開始され、大正14年より本格的生産の軌道に乗った。この当時は既に金属印刷業者も20社を数えるようになっている。

◇ 昭和時代

昭和の時代に移っても金属印刷業は順調な足どりで発展してきた。昭和15年には東京、大阪の両地区で約30社が操業し、需要部門も塗料缶、油缶、菓子缶などに需要が広まり好調に推移したといえるであろう。しかしこの頃より、ようやくわが国の経済は戦時統制へ移行の兆しが見え、金属印刷の生産も徐々に減産することとなった。



かくして昭和18年には、金属印刷は第二次大戦の不急不要産業として取り扱われることとなり、軍需用の生産を担当する数社を残して大部分は印刷機械をスクラップ化し、兵器などの需要物資へ姿を変えてしまった。この時が金属印刷の衰微の時代であり、この状態は終戦まで続いた。

終戦直後は、物資不足からすぐには立ち直れず若干の日時を要したが、昭和24～25年頃から本格的に操業され、時あたかも旺盛な消費経済を迎えるようになって、ますます生産も伸びてきた。メーカー数も終戦直後にわずか数社のみの操業状況であったが、戦後20年の今日になって102社を数えるようにまで発展してきた。いわゆる金属印刷第二期の全盛時代といえる。

現在では、ますます激化しつつある宣伝、サービスの旺盛な消費経済時代に必要不可欠の産業として時代の脚光を浴びるようになったものの、これからは同業者間の競争がいよいよ深刻の度を増すようになって、歴史的には転換期に差し掛かっているようにみられる。

金属印刷が芸術的作品の工業化製品であるためか、他の業種とは異なる特殊なカラーを持っている。すなわち現在の時点における金属印刷は、印刷機械が生産していると言えるものの、根本は印刷インキを人間の目によって配合する良否が、印刷製品の色彩感覚の良否を決め、ひいては製品の品質的辞価の重大な要素となるからである。この様に美術作品を工業化して作るところに一般の生産工業と業態の異なるところがある。従って金属印刷業種は、他の生産業種とは特殊な関係をもち、一般加工業者と遊離した状態にあり極めて独特の世界を築いている。

